

今こそグローバルサウスの出番、サンバの国との戦略的提携を！

国際部 和田昭彦

アメリカのトランプ大統領が相互関税という爆弾を投下しました。「報復するな、交渉せよ、さもなくば、さらに悪い結果を招くだろう」。さながら何かの戦争映画を見ているようです。第二次世界大戦後の冷戦体制、ベルリンの壁崩壊後の自由貿易体制、グローバリゼーションを経て、相互関税は、こうした政治・経済体制の激震的な大きな変化とも言うべきものでしょう。これは世界システムの大きな変化であり、貿易のゲームチェンジ＝第二グローバリゼーションの始まりではないか。つまり、それは単なる保護貿易でも地域経済のブロック化でもなく、あらゆる国と国とが国益を軸に相互に多数の戦略的な互惠関係を築いていく世界に突入していくのではと思う次第です。

本コラムでは、今回の大きな世界的な節目を迎え、日本はどう対処してゆくべきかと考えたときに、グローバルサウスの価値がかつてないほど高まり、ブラジルが外交面、経済面、文化面で存在感を高めていくのではないかと、日本はブラジルに対して「地球の裏側の遠い国だから」で済ますことはもはや許されず、ブラジルとの戦略的な関係、特に農業の分野でさらに提携を深めていくべきでは、との見解を述べたいと思います。

上記の見解に至る分析道具は、至極単純ですが、日米、日伯（注：伯はブラジル）、米伯、さらには中伯の貿易データです。トランプ関税の影響でのこれらの貿易構造がどのように変化していくのか考察します。加えて、日本とブラジルの相性について、サンバカーニバルに代表されるブラジル文化を例に挙げ、筆者の駐在経験も踏まえて説明します。

まず、日米貿易データを見てみましょう。

【2021 年日本の輸出相手国】

中国	179,843.7	21.6%
アメリカ合衆国	148,315.1	17.8%
韓国	57,695.7	6.9%
タイ	36,246.0	4.4%
ドイツ	22,790.5	2.7%
その他	386,023.2	46.6%

〔億円〕

【2021 年日本の輸入相手国】

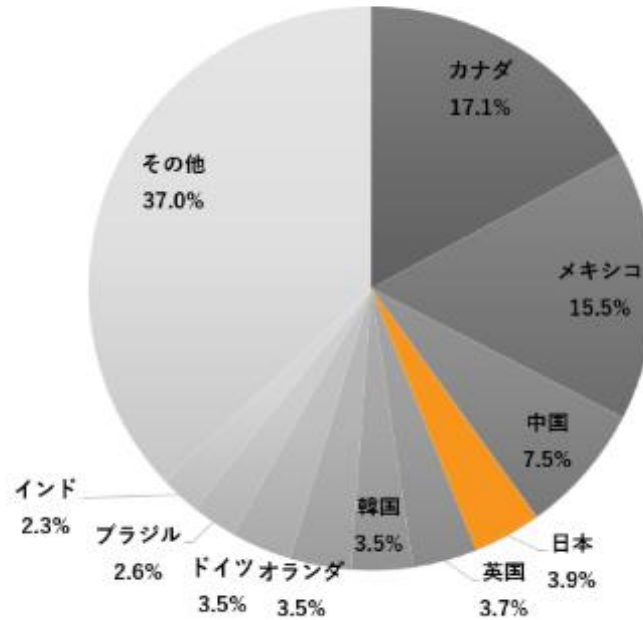
中国	203,818.1	24.0%
アメリカ合衆国	89,156.3	10.5%
オーストラリア	57,533.4	6.8%
韓国	35,212.6	4.1%
サウジアラビア	30,193.5	3.6%
その他	432,836.5	51.0%

〔億円〕

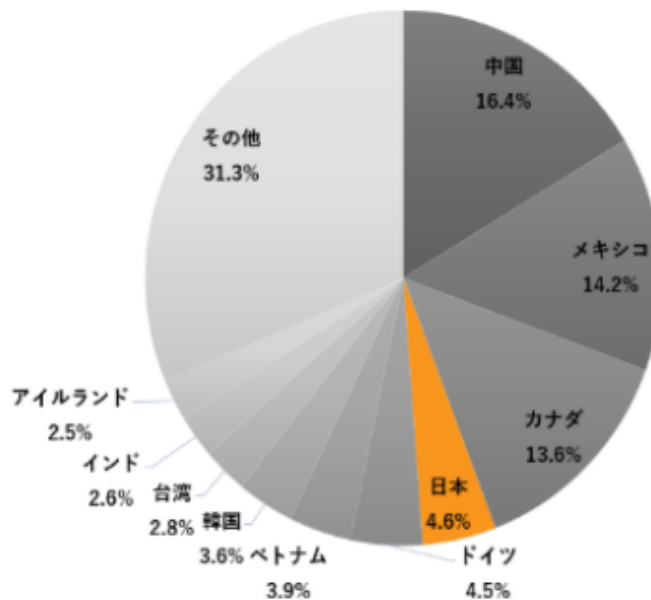
出典：財務省貿易統計

言うまでもなく、米国は日本にとって輸入・輸出ともに中国に次いで第二の貿易相手国であり、日本経済におけるその重要度は論を待ちません。一方、下図の通り、日本は米国にとっても第 4 位の貿易相手国であり、かつ貿易赤字が恒常的に続いており、今回のトランプ政権がやり玉に挙げています。

米国の輸出（2022年）



米国の輸入（2022年）

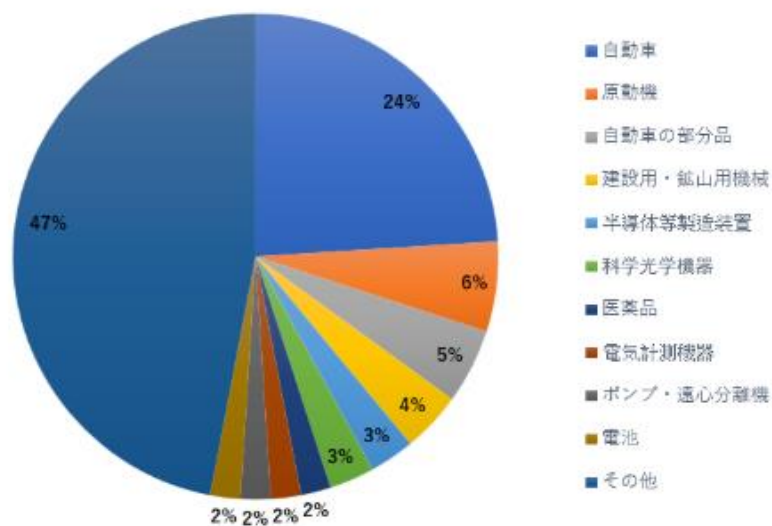


外務省『米国経済と日米経済関係』を基にSTANDAGEが作成

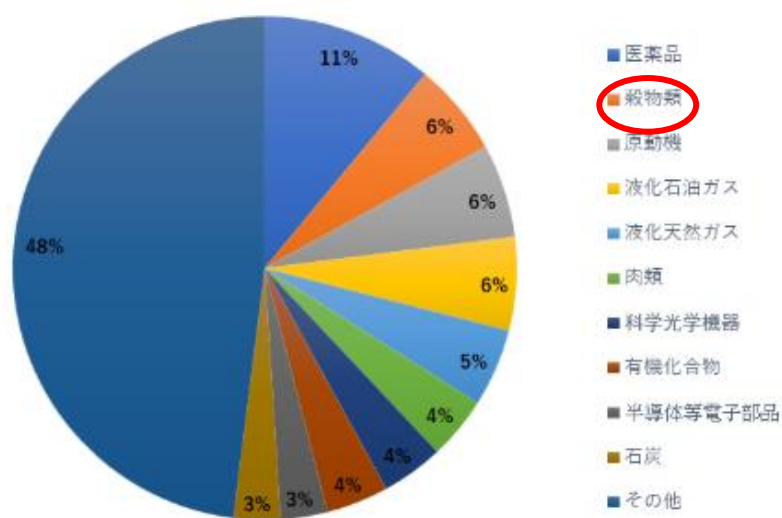
日本から米国への輸出品目、米国から日本への輸出品目を具体的に見てみると以下の通り

です。

「日→米」 (2022年)



「米→日」 (2022年)



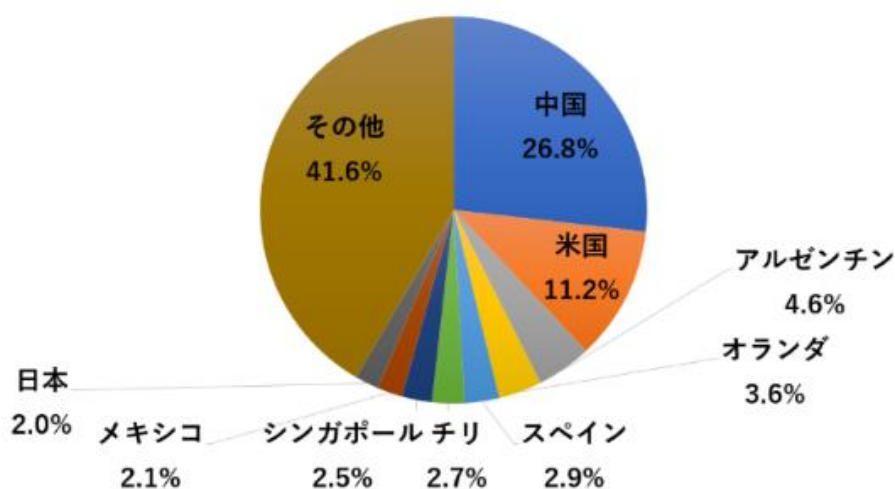
外務省『米国経済と日米経済関係』を基にSTANDAGEが作成

日→米、米→日ともに互いが先進工業国として得意な付加価値のある工業・化学製品を売買しているわけですが、この貿易構造のなかで、今後の日本が米国との関税交渉で決定的に不利な品目は米→日のなかの米国が世界で最も競争力のある「穀物類」です。この中身は小麦・

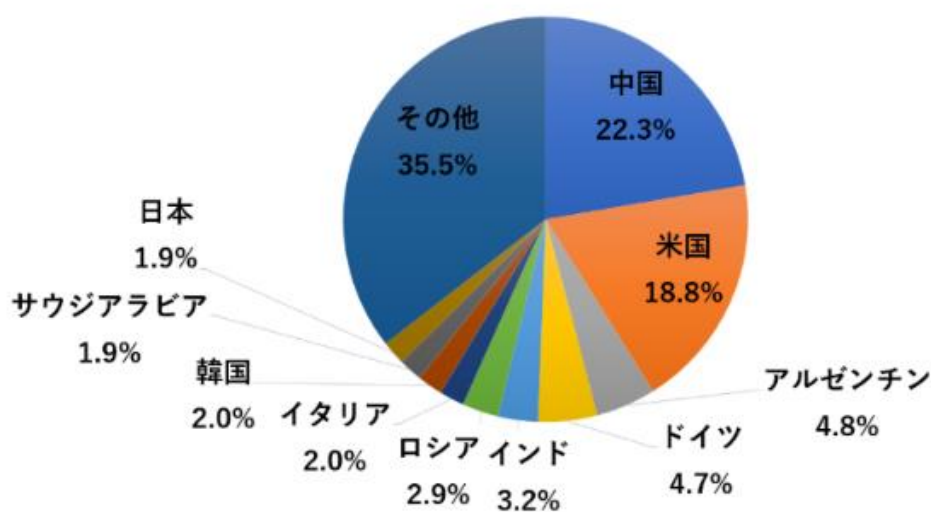
大豆・トウモロコシで、まさに生命の維持にかかわる基礎食料です。日本の食料自給率 38% を考えると日本は過去も現在も未来(?) も米国に大きく依存をしなければならない運命にあります。日本は米国との関税交渉にあたり LNG の輸入拡大を交渉材料に使うとの報道がありました。が、「穀物輸入を減らすぞ」といったカードは現状ではなかなか使えないということでしょう。

ここでブラジルの貿易状況を見てみます。

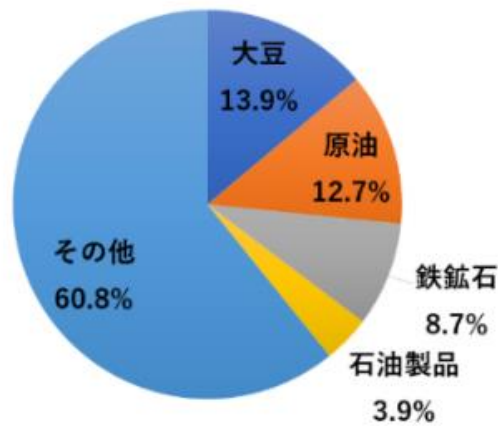
ブラジルの主要輸出国 (2022年)



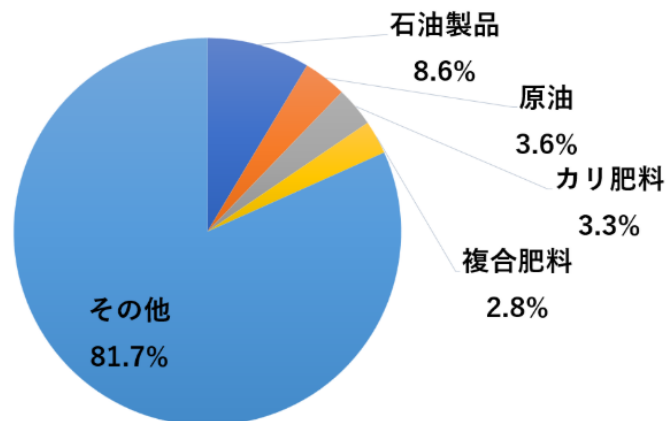
ブラジルの主要輸入国 (2022年)



ブラジルの主要輸出品目（2022年）

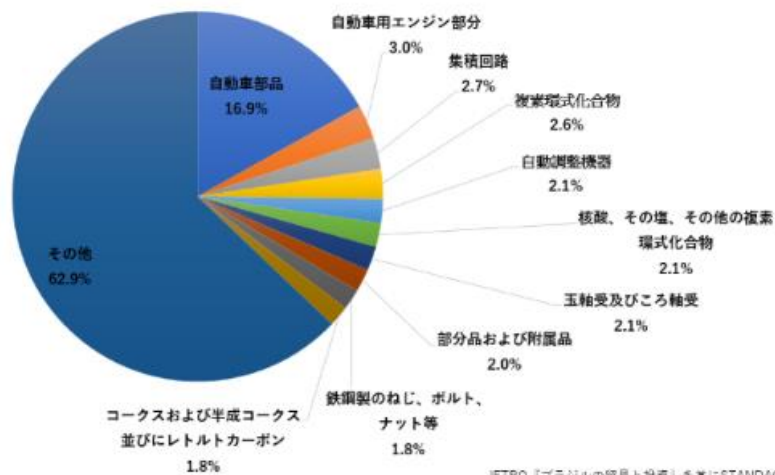


ブラジルの主要輸入品目（2022年）



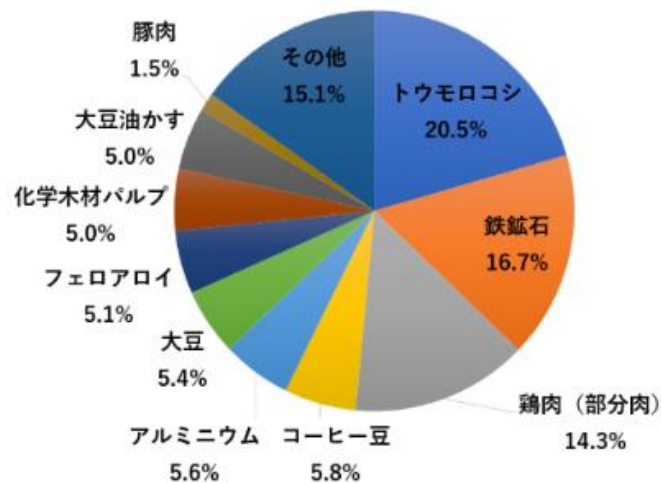
外務省『ブラジル連邦共和国基礎データ』を基にSTANDAGEが作成

日本→ブラジルの主要貿易品目（2022年）



JETRO『ブラジルの貿易と投資』を基にSTANDAGEが作成

ブラジル→日本の主要貿易品目（2022年）



ブラジルにとって中国・米国は輸出・輸入ともに最重要国となっています。ブラジルの輸出品目は大豆・原油・鉄鉱石といった農業・資源大国らしい一次产品中心、輸入は肥料等の農業資材が占めており、一次産業依存型の経済構造となっています。つまり、地球の北と南の対比構造としてのグローバルサウスの典型的な貿易構造といえます。米国にとってのブラジルは上記図表で示したように、輸入は上位 10 か国にも入っていない一方、ブラジルにとっての米国は重要な輸出先となっています。グラフにはでてきませんが、米国の鉄鋼の輸入先はカナダの次がブラジルとなっており、今回の鉄鋼・アルミに対する追加関税 25%はブラジルに相当な影響をもたらし、その交渉も過去のような割当制に落とせるか否か、難航が予想されます。

さらに、ブラジルの対中国の貿易構造をみますと、ここでは詳しいグラフはありませんが、2009 年以降、中国はブラジルの最大貿易相手国となり、2023 年には 1570 億ドルに達し、主に大豆、鉄鉱石、牛肉を爆買いしています。中国はブラジルへの投資も熱心であり、インフラ、再生可能エネルギー、通信分野を中心に投資を行っており、2009 年には中国が北ブラジルで食料輸送のための港湾インフラに投資するというニュースを筆者がブラジル駐在時に耳にした時は、「中国はそこまでやるのか、日本はどうなるんだ、完全に買い負けてしまうぞ」と思ったほどでした。ブラジルが米国ではなく中国となぜかくも接近するのは、経済原則はもちろんですが、ブラジルと米国のイデオロギーの違いも大きいと思います。ブラジル人は、米国は同じ多民族国家であっても白人対その他の構図が鮮明で覇権主義的とみなしており、混血国家で人種差別がなく、南米の大国を自負するブラジルとは異質だと感じているようです。

ブラジルを多民族国家で人種差別がないと申し上げましたが、それを最も具現化しているのがサンバカーニバルだと思います。サンバは18世紀の奴隷貿易でアフリカから連れてこられた黒人音楽が発祥で、そこにラテン的乱痴気騒ぎのブラジル式カーニバルと結合して今の姿となるわけです。カーニバルは単なるお祭りではなく、Escola de Samba と呼ばれるチーム単位で争う、テーマに沿った踊りと山車の競演の真剣勝負の場でもあります。踊りさえできれば誰でも、人種・職業・国籍など一切関係なく来るもの拒まずの開かれた世界です。筆者はサンパウロの名門チーム「X9」（シスノービ）（右の写真参照）に所属、サンバの手ほどきを受けました。基本ステップはマスターできたものの、その後の応用編についていけず、先生からダメだしを何度も食らい、ここはラテンらしからぬ厳しい勝負の世界でもありました。



さて、以上の分析・経験から、筆者が言いたかったことは、①今後の日本は米国との経済面（防衛費負担面でも）での交渉如何では、米国中心の食糧安保が交渉カードに使われるリスク・可能性が高まっていること、②食料安保の代替候補は日本の面積の何倍もの未開拓農業適地が残された地球最後の農業フロンティアたるブラジルをおいては考えられないこと（注：穀物大国の豪州があるじゃないかと思われるかもしれませんが、ここは干ばつリスクが高く、基礎原料の安定供給面では不安があると思います。実際、筆者総合商社在籍時には豪州干ばつに幾度とさらされ、苦勞していた現場を何度も見てきました）、③米中関係の悪化に伴い、中国がブラジルへの投資をさらに加速させていく前に日本も手を打っていくべきであること、④サンバが象徴する多民族受容性と日系移民が大活躍しているブラジルは日本を受け入れる素地が高いこと（確かに中国とブラジルの関係性は高まっていますが、礼儀正しくて苦勞を重ねて真面目に働きブラジルを今の農業大国に育てたのは日系移民であると広く認知されており、日系人はリスペクトされています）。尚、今回は詳細まで立ち入らず、将来機会あれば触れたいと思いますが、ブラジルは消費市場でもまだ開拓余地が多く、日本の大企業のみならず、今後は中小企業の活躍の機会が大いにあります。

貿易のゲームチェンジの今、日本がウン・ドイス・トレース（1・2・3）と軽やかなサンバのリズムにのってブラジルへ向かっていくことを祈念してやみません。 以上